

氏 名（本 籍）	姚 佳 秀（中国）
学 位 の 種 類	博士（国際文化学）
学 位 記 番 号	甲 国第 6 号
学位授与年月日	平成 30 年 3 月 17 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項
論 文 題 目	中国語の“谁”と日本語の「誰」の意味・機能に関する対照研究
論 文 審 査 委 員	主査 戦 慶勝 教授 博士（国際文化学 鹿児島国際大学） 副査 外菌 幸一 教授 博士（文学 九州大学） 副査 高津 孝 教授（鹿児島大学） 文学修士（京都大学）

## 内 容 の 要 旨

姚佳秀氏は中国の大学の日本語専任講師である。2009年大連外国語大学修士課程を修了し、2013年4月鹿児島国際大学大学院国際文化研究科博士後期課程に入学した。修士課程のときからずっと日本語の疑問詞と中国語の疑問詞の対照研究に取り組んでいるが、本学の博士後期課程に入学した後、研究範囲を絞り、日本語の「誰」と中国語の“谁”の典型的な意味・用法と非典型的な意味・用法について、これまでの研究を精査し高度の対照言語学知識に基づいて独創的な研究成果を出している。

姚佳秀氏は鹿児島国際大学大学院国際文化研究科博士後期課程に在学中、論文3点（うち査読付き論文2点）を公表し、中国日本語学会主催の全国大会で報告を行っており、今回提出した博士学位申請論文はこれまでの研究業績を踏まえて作成したものである。この論文は（30行×400字）322頁で書かれており、基準字数を大幅に上回っている。本論文は次のように展開している。

### 1 研究の目的と意義

中国語における“谁”（[shuí][shéi]）と日本語における「誰」は名を知らない人、または、その人とはっきりわからない人を指す。しかし、日本語では疑問詞が終助詞の「か」を伴い、それとともに質問や疑問の意味を表すことが可能であるのに対して、中国語では疑問詞が“语气助词”（終助詞）の“吗”を伴い質問や疑問を表すことが不可能である。辞書の解釈では、中国語の“语气助词”（終助詞）の“吗”と日本語の終助詞の「か」が対応関係にあるとされているが、両者の意味・機能にずれがあるのも事実である。つまり、終助詞の「か」や“语气助词”の“吗”を伴い疑問文を作れるかどうかということに示すように、典型的な意味・用法でありながら、中国語の“谁”と日本語の「誰」は同じ使用条件を有しているわけではない。

非典型的な意味・用法においても“谁”と「誰」の使用条件が一致していない。たとえば、“谁愿意去谁就去”のような文環境における二つの“谁”は疑問のモダリティを表さないで、どちらも日本語の「誰」で訳すわけにはいかない。さらに「誰か来た。」(有人来了。)は日本語の表現としてはきわめて自然であるのに対して、中国語の例をとってみると、このような意味を訴える場合には疑問詞の“谁”を用いないのが普通である。以上のような問題意識をもって、本論文は次の三つの問題について答えを導き出すことを目的とした。

- I. 中国語における“谁”はどのような意味・機能を有しているのか。その典型的な意味・用法と非典型的な意味・用法がどのように分布しているのか。
- II. 日本語における「誰」はどのような意味・機能を有しているのか。その典型的な意味・用法と非典型的な意味・用法がどのように分布しているのか。
- III. 中国語の“谁”と日本語の「誰」の意味・機能はどのように共通し、どのように食い違っているのか。

対照研究を行うためには、まず中国語の“谁”がどのような意味・機能を有し、日本語の「誰」がどのような意味・機能を有しているのか、という問題を解明しておかなければならない。それに基づいてIIIの問題について答えを出し、そうすることによって、中国語の“谁”の構文的分布と日本語の「誰」の構文的分布を明らかにし、両者の共通点や相違点を明らかにすることが可能である。

本研究の意義は次のように位置付けることができる。中国語の“谁”はどのような意味・機能を持っているかを明らかにすることによって中国語学の研究に寄与することが可能である。日本語の「誰」はどのような意味・機能を有しているかを究明することによって日本語学の研究に役立つことが可能である。中国語の“谁”と日本語の「誰」の共通点や相違点を解明することによって中国語教育・日本語教育に寄与する。

## 2 先行研究と研究の範囲

本研究は現代中国語における“谁”と現代日本語における「誰」の典型的な意味・用法とそれぞれの意味・用法の拡がりや射程を入れて研究対象とした。それは具体的に二つの内容に分けて考えることができる。

- ①意味・機能において中国語の“谁”と日本語の「誰」はどの部分が同じでどの部分が相違しているか。
- ②語用論の観点からみて中国語の“谁”と日本語の「誰」はどの部分が同じでどの部分が相違しているか。

この2つの問題に答えるためには、まず先行研究の問題点を指摘し、それから中国語の“谁”の分布状況と日本語の「誰」の分布状況を明らかにしなければならない。個別研究の成果を踏まえ、対照言語学の観点から中国語の“谁”と日本語の「誰」の類似点や相違点をうきばりにする。

日本語の疑問詞に関する日本語学的研究は尾上圭介（1983）や奥津敬一郎（1984）や寺

村秀夫（1991）、さらに仁田義雄（2009）などがあげられる。日本語の「誰」は疑問を表すものとして位置づけられるのが普通であるが、すべての研究者がそれを「疑問詞」と呼んでいるわけではない。たとえば、『国語学大辞典』（1980）に「疑問詞」という項目があるのに対して、尾上圭介（1983）では「不定語」という用語が用いられ、奥津敬一郎（1984）では「不定詞」という言い方が使われている。さらに、寺村秀夫（1991）や仁田義雄（2009）などでは「疑問語」という言い方が使われている。

一方、中国語学の分野では“谁”は普通“疑问代词”（疑問代名詞）と呼ばれている。“疑问代词”が“代词”（代名詞）の下位分類の一種類と見なされ、“代词”が独立した品詞として考えられているようである。ただし、朱德熙（1979）や王力（1985）や邵敬敏（1999）などが“疑问代词”という用語を使っているのと違って、吕叔湘（1979）では、“无定代词”（不定代名詞）と“不定指代词”（不定指示代名詞）のように呼ばれている。

専門用語の違いを見ても、いわゆる疑問詞の中身に関する見解は統一されていないことが明らかである。本研究では便宜上、「疑問詞」という用語を使い、研究範囲を中国語の“谁”と日本語の「誰」の意味・用法に限定する。ただし、従来の個別研究は“谁”と「誰」の典型的な意味・用法に光をあてているが、意味の広がりとしての非典型的なものには光が当たらないようである。先行研究を批判し、本研究の研究範囲を示した後、中国語の“谁”の構文的分布と日本語の「誰」の構文的分布を2つのテーマとして詳しく検証し、さらに個別研究の結果に基づいて中国語の“谁”と日本語の「誰」について対照分析を行った。

### 3 研究方法

本研究のプロセスとして、まず中国語の“谁”の構文的分布、日本語の「誰」の構文的分布を明らかにし、それから中国語の“谁”の意味・機能、日本語の「誰」の意味・機能について対照言語学の観点から両者の類似点や相違点を検証した。

本研究は客観性を保つために、新聞や小説などの実例を分析の対象とし、作例はできるだけ避けた。中国語の“谁”の構文的分布と日本語の「誰」の構文的分布に関する具体的な検証方法として、中国語の“谁”の構文的分布については、小説や“人民网”などから抽出した8000以上の“谁”の用例をデータとして使用した。日本語の「誰」の構文的分布については、『CD-ROM版新潮文庫100冊』、『朝日新聞』、asahi.comなどから抽出した7000以上の「誰」の用例を分析の対象とした。

用例の観察によって仮説を導き、その妥当性を証明した。それによって中国語の“谁”と日本語の「誰」の意味・機能の輪郭を示した後、対照研究の観点から、中国語の“谁”の構文的分布と日本語の「誰」の構文的分布に焦点を当てて両者の類似点や相違点を浮き彫りにした。

### 4 研究のプロセス

本論文は3編に分けられ、序章と終章を含めて11章からなる。第1編では、中国語の

“谁”の構文的分布について述べ、“谁”の意味・用法について検討した。第1章、第2章、第3章では、これまでの研究の問題点を指摘し、疑問表現における“谁”の典型的な意味・機能と“谁”の意味・機能の広がり、及び“谁”の語用的意味を明らかにした。

第2編では、日本語の「誰」の構文的分布と意味・機能の広がり及び語用的意味を明らかにした。具体的に、第4章では、「誰」の意味・機能について述べ、第5章では「誰」の意味・機能の広がりについて述べた。さらに、第6章では、「誰」の語用的意味について説明した。

第3編では、対照研究の観点から中国語の“谁”の構文的分布と日本語の「誰」の構文的分布について総合的に分析を行った。個別研究としての第1編と第2編の分析の結果を踏まえ、第7章では、疑問を表す中国語の“谁”が日本語の「誰」とどのように関連し、どのように相違しているかについて述べた。第8章では、“谁”と「誰」の意味・機能の多様性について述べ、“谁+都～”と「誰+でも」「誰+も」の共起制限の比較と“谁+也～”と「誰+も」の共起制限の類似点や相違点を照らし合わせた。

さらに、第8章では、不定を表す“谁”と「誰+か」の分布状況について対照分析を行った。中国語の連鎖表現は日本語母語話者の中国語学習者にとって難関の一つであるので、これも対照分析の対象として日本語との対応・非対応関係について検証した。第9章では、語用的意味に焦点をあてて、中国語の“谁”と日本語の「誰」がどのように関連し、どのように相違しているかについて具体的に検証した。終章では本研究の分析の結果と今後の課題を総合的にまとめた。

## 5 結論

第1編と第2編の議論で、中国語の“谁”と日本語の「誰」について、中国語学的研究、日本語学的研究の観点から両言語においての意味論的特徴、統語論的特徴、さらに語用論的特徴を記述した。第1編の議論は中国語学的意義があり、第2編の議論は日本語学的意義がある。第1編と第2編の議論の結果は次のようにまとめられる。

- I. 疑問のモダリティを表すのが中国語の“谁”のもっとも基本的な意味・用法である。しかし、“谁”は疑問の意味を表すほかに、「例外なし」や不定といった意味を表すこともある。さらに、“谁1～谁2～”のような形で“連鎖句”(「連鎖構文」)と呼ばれる文をつくることが可能である。また、語用論の観点からみれば、“谁”は①反語②代用③問い返す④反駁のような語用的意味を表すこともできる。
- II. 疑問のモダリティを表すのが日本語の「誰」のもっとも基本的な意味・用法である。しかし、「誰」は疑問の意味を表すほかに、「例外なし」や不定といった意味を表すこともある。日本語の「誰」の語用的意味は主に①反語②代用③反駁の三つに分布している。

本研究の第3編では第1編と第2編の研究成果に基づいて、対照研究の観点から中国語の“谁”の構文的分布と日本語の「誰」の構文的分布について総合的に分析を行い、次の

ような結果が得られた。

Ⅲ. 中国語の“谁”と日本語の「誰」はともに主語として機能したり、目的語として機能したり、補語として機能したりすることができる。さらに、“谁”と「誰」によって構成される疑問文が文の成分として機能したりすることもできる。中国語の文の中に疑問詞の“谁”が現れたら、文末にさらに“吗”をつけて“谁～吗”のように言うことができない。それに対して、日本語の場合は疑問の意味を表す終助詞の「か」が疑問詞の「誰」と呼応して使われるのが普通である。連体修飾語として機能する場合、中国語の“谁”は“的”を要求したり要求しなかったりするのに対して、日本語の疑問詞の「誰」は直接に名詞を修飾することがなく、名詞を修飾する場合、格助詞の「の」を取り入れなければならない。疑問の意味を表す中国語の“谁”は擬人法として使われることもある。それに対して、日本語の「誰」はそのような意味用法を持たない。

Ⅳ. “谁都～”は否定の述語と結びつく場合、「誰＋も」と対応するが、「誰＋でも」とは非対応関係にある。広く認められる一般論のことを表す場合の“谁都～”と可能表現が後続する場合の“谁都～”は「誰＋でも」と「誰＋も」の両方に対応する。アスペクトの観点からみれば、過去のことを表す文に生起した“谁都～”は「誰＋も」と対応関係にあるが、「誰＋でも」とは非対応関係にある。

「誰＋でも」「誰＋も」は格助詞の「の」と一緒になって機能する場合、中国語の“谁都～”とは対応しない。動詞の否定形と共起する「誰＋も」は基本的には、“谁也～”と対応関係にある。「誰＋も」の後に存在しないことを表す「いない」と形容詞の「ない」が続く場合、“谁也～”とは非対応関係にある。「誰＋も」は格助詞の「の」と一緒になって機能する場合、“谁也～”とは対応しない。

推測のモダリティが含まれる文、仮定条件を表す文、譲歩文に用いられた場合の“谁”の意味・機能は日本語の「誰＋か」と対応する。また、“吗”と“吧”と呼応し、不定を表す場合の“谁”や“有没有”“是不是”を受けた場合の“谁”は日本語の「誰＋か」と対応する。ただし、中国語の「不定」の意味を表す“谁”は否定文に生起した場合、「不定」を表す「誰＋か」とは対応しない。中国語の“谁”は“谁1～谁2～”のような連鎖構文を構成することができる。日本語の「誰」は同様な意味・用法を持たない。

日本語では、「誰＋か」は後続の名詞、または名詞フレーズと同格関係を結ぶことができるのに対して、中国語の「不定」を表す“谁”はそれと同じような意味・用法を持っていない。日本語の「誰＋か」という構造は「～か＋誰か」のような形で並列関係を構成することが可能である。それに対して、中国語の「不定」を表す“谁”は並列関係を結ぶことができない。

Ⅴ. 中国語と日本語の疑問詞による反語表現の語用的意味はほぼ対応関係にある。しかし、「“谁”＋思考動詞」の形で用いられる場合は日本語の「誰」とは非対応関係にある。“谁”が既知の人を代用する場合、日本語の「誰」と対応する。しかし、

未知の人の代用と露骨に言うのを避ける場合の代用については、「誰それ」で訳すほうが適切である。“谁叫～”“谁让～”は疑問文をつくり、自分の行為の報いを自分自身が受けるべきだという語用的意味を表すことができる。しかし、日本語の「誰」はそのような語用的意味を表す用法を有していない。“谁说（的）～”は意図された内容を否定する語用的意味を表すことができる。日本語の「誰」もそのような語用的意味を表すことが可能である。

本論文では、現代日本語の「誰」と現代中国語の“谁”の意味・用法に焦点をあてて、それぞれの意味特徴や統語特徴を考察し、さらに語用論の観点から両者の共通点や相違点を明らかにした。しかし、中国語の“谁～都～”“谁～也～”や日本語の「誰＋も」「誰＋でも」の表す語用的意味は第二言語の学習者にどのような影響を与える可能性があるかについては十分な考察ができなかった。これらの問題については、今後の課題とする。

## 審査結果の要旨

### 1. 評価

この論文は現代日本語の「誰」と現代中国語の“谁”([shuí][shéi])の意味・用法に焦点をあてて、それぞれの意味特徴や統語特徴を考察し、個別言語に関する研究を通して得られた研究成果をもとに、対照研究の観点から両者の共通点や相違点を網羅的に記述することを試みたものである。

論文本体については、本研究科が要件とする字数基準の下限を大幅に超えており、A4用紙320枚以上に達している。提出された審査論文には既発表の論文が3篇含まれ、うち査読付きの論文が2篇含まれているので、学位申請の要件を満たしている。

姚佳秀氏は修士課程の時からずっと日本語の疑問詞と中国語の疑問詞の対照研究に取り組んでいる。本学の博士後期課程に入学したあと、研究範囲を絞り、日本語の「誰」と中国語の“谁”の意味・用法について、大量の用例を観察し、高度の対照言語学知識に基づいて独創的な研究成果を出している。

中国語の“谁”と日本語の「誰」の意味・機能に関する個別研究がみられるものの、対照研究の立場から両者の意味・機能について網羅的に研究する論文はまだないようである。その意味においても研究テーマの選定が説得性をもち、学術性の高い研究として認められる。

### 2. 結論

今回提出された博士学位請求論文は2007年から10年以上にわたって考察した成果をまとめたものである。日本語では「誰＋か」は後続の名詞・名詞フレーズと同格関係を結ぶことができるのに対して、中国語の“谁”はそれと同じような意味・用法を持たない

という結論、日本語の「誰＋か」は「～か＋誰か」のような形で並列関係を構成することができるのに対して、中国語の“谁”は並列関係を結ぶことができないといった結論はこの論文のオリジナリティであり、第二言語教育に資するものと思われる。

結論として学外委員を含む論文審査委員会は姚佳秀氏が「研究者としての自立性」と「専門研究の独創性」等の条件を満たしており、博士（国際文化学）の学位を授与することが適当だと判断した。